厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究

コミュニティベースの介入評価のための予防行動調査の実施と分析

研究分担者：金子典代（名古屋市立大学看護学部）
研究協力者：塩野徳史（財団法人エイズ予防財団、名古屋市立大学看護学部）、新ヶ江章友（財団法人エイズ予防財団）コーナ・ジェーン（財団法人エイズ予防財団、名古屋市立大学看護学部）、伊藤俊広（独立行政法人国立病院機構仙台医療センター）、佐藤未光（RainbowRing）、内海眞（独立行政法人国立病院機構東名古屋病院）、鬼塚哲郎（MASH大阪）、山本政弘（独立行政法人国立病院機構九州医療センター）、健山正男（琉球大学大学院医学研究科・感染症・呼吸器・消化器内科学）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

本研究は、東北、東京、名古屋、大阪、福岡、沖縄地域で実施するゲイCBOの活動の評価のための量的調査の計画・実施・分析を通して、プログラムの効果評価を実施し、課題を明確化することにある。3年間において、全介入地域で複数のコミュニティベースの介入評価のための調査を実施した。MSMを対象とする調査は、研究班発足時より様々な方法を模索してきたが、本研究班において、商業施設顧客、クラブイベント、サークル参加者への大規模な調査を質問項目を一致させて同時期に行うことが可能となり、全国レベルで効果評価を行う基盤が整った。3年間で、ゲイ・バイセクシュアル男性を対象としたクラブイベントに関心のある層を対象としたインターネットによる行動調査（東北）、サークルイベント参加者への質問紙調査（東北、名古屋、福岡）、ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント(NLGR)参加者に対する調査、ゲイ・バイセクシュアル向け検査会の受検者調査（名古屋）、商業施設顧客を対象とする大規模質問紙調査（名古屋、大阪、博多、沖縄）、滞日外国人を対象とするインターネット調査を行った。特にサークルイベント参加者への調査、商業施設利用者を対象とする大規模質問紙調査については平成22年度では、質問項目を全国で統一できたことで、地域間比較が可能となり評価の精度が向上した。平成22年度の商業施設顧客を対象とする大規模質問紙調査から、介入プログラム接触別に比較すると、名古屋、福岡、沖縄の全地域においてコミュニティセンター来訪者、コミュニティペーパー購読群の方が、非接触群より、検査受検経験割合が高く、HIV感染者を身近に感じており、HIV/AIDSの対話経験割合が高かった。大阪地域ではバー顧客調査を計3回実施しているが、経年的評価によりSaL＋、distaやPluS＋イベントなどの介入プログラムの参加や認知の上昇、特定相手との性行動におけるコンドーム常用割合の上昇など介入の効果を示す結果が示されつつある。各地域での調査の課題をとらえつつ今後も継続的な介入の評価調査の実施が必要である。

A. 研究目的

MSMにおけるHIV/STI拡大の予防、早期検査受検、受療開始を支援する環境を構築することを目的に、2000年からゲイ・ボランティア組織（以下、ゲイCBO）による啓発活動体制を構築し、活動の効果評価を研究してきた。東京、大阪のみならず名古屋、福岡、仙台、沖縄でもゲイCBOによる商業施設等を介した啓発活動が

定着しつつあり、その活動を評価する調査も各地で実施されるようになってきた。本研究は、中でも東北、東京、名古屋、大阪、福岡、沖縄で実施するゲイ CBO の活動の評価のための量的調査の計画・実施・分析を通して、プログラムの効果評価を実施し、課題を明確化することを目指している。

B. 研究方法

平成 20-22 年度の 3 年間で、下記の調査研究の計画、実施、分析を行った。すべての調査の計画は名古屋市立大学看護学部の倫理委員会から実施承認を得ている。集計分析には SPSS-ver11.0 を用いた。図 1 の通り 3 年間にわたり 6 つの介入地域で様々なコミュニティベースの調査を実施した。

表 1. 3 年間に実施した主要調査

	大阪	東京	名古屋	福岡	東北	沖縄
2008	クラブ調査 検査受検者調査		NLGR来場者調査 検査受検者調査、RDS	バー調査		
2009	バー調査 検査受検者調査	クラブ調査	NLGR来場者調査 検査受検者調査		クラブ調査 RDS(スポーツ)	
2010	クラブ調査		バー調査 サークルイベント調査 NLGR来場者調査 検査受検者調査	バー調査 サークルイベント調査	クラブ調査 サークルイベント調査	バー調査

1. 商業施設（バー）利用者を対象とする調査（H21 大阪、H22 福岡、H22 名古屋、H22 沖縄）

1) 対象者：各地域 NGO がアウトリーチを行っている商業施設（バー）の顧客

2) サンプリング：参加協力を得られた商業施設の顧客

3) 方法：商業施設のオーナーから調査内容の説明を行い、無記名の質問紙を手渡し、回答は郵送法にて回収される仕組みを採用した。

2. RDS 調査(H20 名古屋、H21 東北)

1) 対象者：各地域 NGO のメンバーから紹介層を広げ参加協力を申し出たゲイバイセクシュアル男性、サークルイベントに参加した 20 歳以上のゲイ、バイセクシュアル男性

2) サンプリング：NGO メンバーが直接またはメンバーが開設する PC サイトを通じて知人に携帯電話による回答を依頼、サークルイベントでは会場内でスタッフから直接声かけを行い携帯電話による回答を依頼する。一度回答したものはまた知人・友人にアンケートの回答を依頼し、紹介層を伸ばす仕組みを取り入れている。

3) 方法：RDS 法による携帯電話調査である。謝礼は買い物に使用できる電子クーポン券である。

3. サークルイベント参加者対象調査（H22 東北、H22 福岡、H22 名古屋）

1) 対象者：仙台、福岡、名古屋において実施されているゲイ向けスポーツサークルが主催するスポーツイベント参加者

2) サンプリング：参加協力を得られたイベント参加者

3) 方法：イベントの運営スタッフから調査の説明を行い、無記名の質問紙を手渡し、回答は会場で回収する方法を採用した。謝礼はゲイバーで使用可能なチケットとした。調査は各地域に計 3 回実施した。

4. ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント(NLGR)参加者に対する調査（名古屋）

1) 対象者：名古屋市内において実施されたゲイ、バイセクシュアル男性向けイベント：NLGR2008、2009、2010 に参加した者

2) サンプリング：会場でフライヤーを用いて直接来場者に声をかけ自由意思でアンケートブースでの回答を依頼した。

3) 方法：アンケートブースに設置したノートパソコンにて各自、回答入力を依頼した。謝礼は名古屋地域で配布する啓発資材であった。

5. ゲイ・バイセクシュアル向け検査会（名古屋）の受検者調査

1) 対象者：2009 年、2010 年に実施されたゲイバイセクシュアル男性向けの HIV 検査会（ＮＬＧＲ検査会、Ｍ検）を受検した者

2) サンプリング：検査会会場にアンケート回答ブースを設置し、回答者には受付にて質問紙を手渡しを行った。

3) 方法：無記名自記式質問紙調査、１人１回の回答を依頼した。

6. ゲイ・バイセクシュアル男性向けクラブイベント関心層への行動科学的調査（H20, H21, H22 仙台）

1) 対象者：①仙台市内で H20、H21 , H22 年に実施されたクラブイベントに参加予定のゲイ・バイセクシュアル男性、

2) サンプリング：事前にパソコンまたは携帯電話からアクセス可能な調査回答用ホームページサイトを開設し、コミュニティサイト等を通じて１人１回の回答を呼び掛ける。

3) 方法：パソコンまたは携帯電話から調査サイトに接続した上での回答である。謝礼は、イベント参加割り引きクーポン画像とした

7. 滞日外国人を対象とするインターネット調査

1) 対象者：日本国内に在住する外国人 MSM と

2) サンプリング：クラブイベント等にて調査回答依頼のフライヤーを配布、ゲイ NGO スタッフやバーオーナーからの直接の声かけ、HP での広告バナーを用いて宣伝を実施した。

3) 方法：インターネットサイトに開設された調査ページに回答者が任意でサイトにアクセスし回答をオンラインでの送信する方法を用いた。

C. 研究結果

以下に各調査で明らかになった点を述べる。

1. 商業施設（バー）利用者を対象とする調査（H21 大阪、H22 福岡、H22 名古屋、H22 沖縄）

H21 年に実施した大阪地域での調査、H22 年に実施した福岡、名古屋、沖縄地域の調査結果を用いて、地域間で介入プログラムの浸透度を比較した。その結果、情報誌の認知はほとんどの地域で、65%を超えており、コミュニティ内での浸透割合は高いことが示された（図 1）。オリジナルコンドームについても 7 割以上のものが認知しており、浸透率は高いことが考えられた（図 2）。

コミュニティセンター認知は、地域により若干の差はあるものの、開所して間もない沖縄においても 59%の高率であり、各地域で活動拠点となるコミュニティセンターの認知が広がっていた。

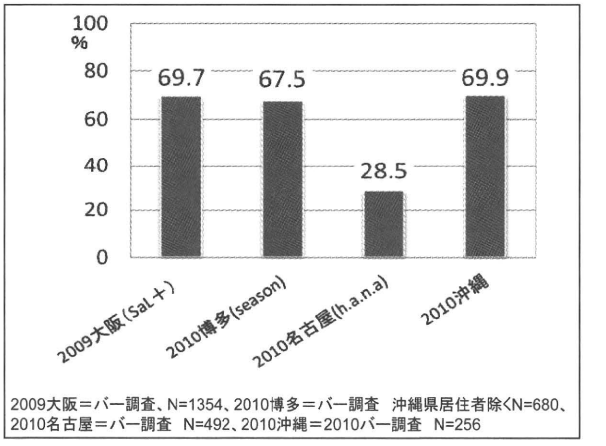


図 1. バー調査地域比較：情報誌の認知（購読と認知の割合を合算）

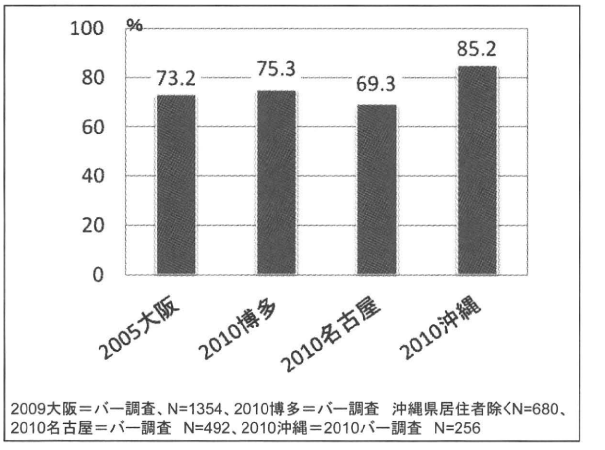


図 2. バー調査地域比較：オリジナルコンドームの認知

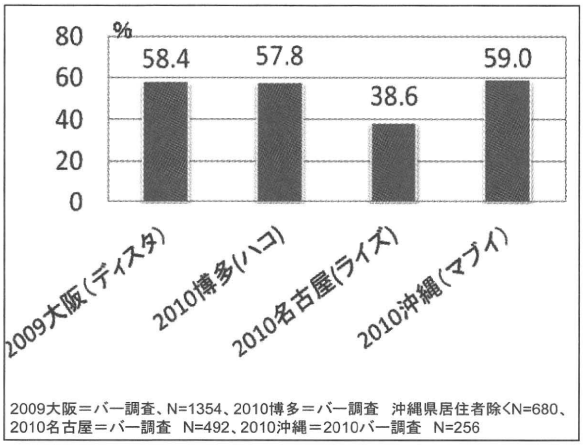


図 3. バー調査地域比較：コミュニティセンター認知

検査行動は、地域により差がみられるものの、名古屋地域において生涯での受検経験割合が65.2%と最も高かった（図4）。

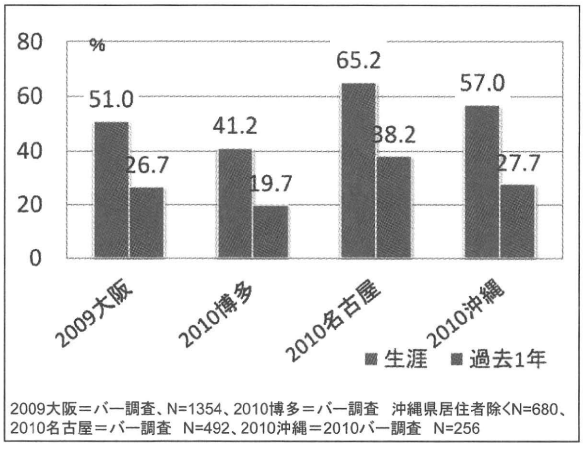


図 4. バー調査地域比較：生涯と過去1年の検査受検経験

いずれの地域でも各地域の団体名を知っている者の方が検査受検率が高い傾向、HIV に関する対話経験割合が高い傾向が見られた。また、各地域のコミュニティペーパーを購読している者の方が購読していないものと比べて検査受検行動、HIV に関する対話経験が高い傾向が見られた。沖縄、福岡地域ではコミュニティセンターを訪問している者の方が、検査行動が高く、周囲とのHIVに関する対話経験も高い割合であった。

大阪地域は、2005 年から隔年で実施し、2009 年は3回目の実施であったため、経年比較が可能となった。コミュニティスペースdistaの認知、SaL+の認知、はそれぞれ58.4%、69.7%であり、2005, 2007年と比較しても上昇がみられていた。PluS＋のイベントの認知と参加率はそれぞれ 66.8%、24.0%であり、2005年の26.4%、4.1%と比較しても上昇がみられた。

生涯検査受検経験、過去1年の検査受検経験はそれぞれ51.8%、26.8%であり、経年的な変化は観察されなかった。

コンドーム常用者割合は、特定相手とは42.6%、その場限りの相手とは54.0%であった。相手別のコンドーム常用割合は経年的にみても特定相手、その場限りの相手それぞれ2005 年は34.1%、44.9%であったのが 2009年には42.6%、54.0%と上昇がみられている。

2. RDS 調査(H20 名古屋、H21 仙台)

RDS 調査は、名古屋、仙台にて実施した。名古屋では55件、H21年の仙台では、122件の回答が集まった。

名古屋地域では、伸びは3層までにとどまった。生涯の検査受検割合は73%、過去1年は51%であった。コンドーム、コミュニティペーパーの受取り割合は64%、64%であった。

仙台では、やろっこから紹介を広げる方法、サークル参加者から紹介を広げる方法の両方を行い、総計122件の回答を得た。やろっこから紹介を広げた群、サークル参加者から紹介を広げた群の間で比較すると、やろっこ群の方が検査受検割合、予防行動実施度は高かった。

3. サークルイベント参加者対象調査（H22 仙台、H22 福岡、H22 名古屋）

東北、福岡、名古屋地域においてそれぞれ104名、522名、151名、総計777名の回答を得た。重複回答を除き、総計777名の回答を分析したところ、年齢は 29 歳未満の者が38.5%、30-39歳の者が42.0%であった。過

去 6 か月の商業施設利用は、ゲイバーが87.9%、ゲイナイトが31.7%、ハッテン場が33.5%であった。生涯のHIV検査受検経験割合は57.4%、過去1年の受検経験は27.8%であった。身近にHIV感染者がいる、いると思うと回答した割合は55.2%、HIV/AIDSに関する周囲の人（友達、恋人）との対話経験割合は59.3%であった。過去6か月におけるセックス相手の出会いの場はSNSが最も多く、過去6ヶ月間のコンドームの常用割合は特定相手とは、35.6%、その場限り相手とは49.1%であった。

4. ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント(NLGR)参加者に対する調査(名古屋)

イベントNLGRではH20年には278名、H21年には485名、H21年には533名からの回答を得た。東海地域に居住するゲイ、バイセクシュアル、または決めたくないと自認するものを分析対象者とした。NLGR参加者には、商業施設を利用する人の割合が比較的多く、生涯における検査受検割合も高かった。

H21年、H22年に実施した調査結果を比較するとH22年度の方が初めてNLGRに来場した者の割合が高く、初めて来場したものの方が生涯 HIV 検査を受検したことのないものが多かった。検査を受検しない理由として、初めて来場するものは機会がなかったこと、結果を知るのが怖いこと、HIV に感染している可能性がないことを挙げるものが多く、複数来場者では、結果を知るのが怖いこと、機会がなかったことを挙げるものが多かった。

5. ゲイ・バイセクシュアル向け検査会（名古屋）の受検者調査

平成20年度からH22年度のNLGR、M検における受検者調査の動向を見ると、年齢が高い層へシフトしており、生涯の受検経験割合も年々増加している。H22年のM検においては96.8%のものに生涯の検査受検経験があった。またH22年のM検は検査受検理由として定期的に受検していることを挙げている者が多く、予防行動も過去の年度より高い傾向があり、介入プログラムの認知も高かった。

6. ゲイ・バイセクシュアル男性向けクラブイベント関心層への行動科学的調査(H20, H21, H22 仙台)

H20年度は293名、H21年度は382名、H22年度は204名の有効回答があった。いずれの調査も宮城県に居住している者が約 6 割であった。ゲイバーを利用している者は4割以上いたが、バーを利用している者の方がコミュニティセンターZEL の認知が高く検査受検経験割合も高かった。

7. 滞日外国人を対象とするインターネット調査

滞日外国人MSMをターゲットとして調査を実施し、244 件のデータを収集した。うち、外国籍のMSM回答者148名のうち、生涯でHIV検査を受検したことがあるものは67.6%、日本国内での受検は37.8%であった。

D. 考察

商業施設（バー）利用者を対象とする調査については、H22 年度には、福岡、名古屋、沖縄の3地域において項目を一致させ同時にほぼ調査を実施することで、地域間比較が可能となった。H21年大阪、H22年度の福岡、名古屋、沖縄の4地域のバー調査の結果を比較し各地域のNGOの介入の浸透度の評価を行った。コミュニティセンターやプログラムの開始時期の差、コミュニティ内での情報の浸透の速さには差があることを考慮に入れる必要があるが、全調査地域で実施されているコミュニティペーパーについては、認知はほとんどの地域で7割近い値であり、MSM向けの資材としての有効性が示される結果となった。福岡、名古屋、沖縄地域では、オリジナルコンドームの作成、アウトリーチも行っている

が、認知はコミュニティペーパーと同様に高かった。検査行動は、地域により差がみられるものの、名古屋地域が最も高く、名古屋地域で重点を置いて行ってきた検査行動の促進の効果が示唆された。H21 年は、新型インフルエンザの対応で全国的に、HIV 検査の受検環境が悪化したことの影響もあると考えられるが、福岡地域では検査行動が他地域より低く今後は検査行動の促進が一つの課題となると考えられる。大阪地域でも H21 年に、主要な HIV 検査提供機関が閉鎖されたが、H21 年度のバー調査の結果からも、H21 年の 1 年間で HIV 検査を受検しようとして断られた経験を持つものが H19-20 年より多いことが示されている。この結果からも、大阪地域での HIV 検査受検環境の悪化の実態と環境の改善が急務であることが示された。いずれの地域においても MSM 向けの検査行動促進の働きかけのみならず、検査環境改善の働きかけは、今後の一つの重点を置くべき課題となるだろう。

大阪地域の 3 回にわたるバー調査結果から経年比較を行うと（dista, SaL+の認知、PluS＋のイベントの認知や参加割合は 2005、2007 年より上昇しており、介入の継続効果が確認できつつある。また過去 6 か月のアナルセックス時のコンドーム常用割合に関しては 2005, 2007 年のバー調査と比較しても特に特定相手との使用に関しては上昇がみられている。3 回の調査から得た結果をもとに今後も更なる効果的な介入を行う必要がある。

また、全地域で各地域の団体名を知っている者、コミュニティペーパーを購読している者の方、コミュニティセンターを訪問している者の方が検査受検経験が高く、HIV に関する対話経験割合が高く、周囲との HIV に関する対話経験が高い傾向が見られた。このことは各地域の NGO が実施しているプログラムは予防意識を高め、検査行動を上げること、また対話経験を増やし、HIV/AIDS への身近感を向上させることには効果があることが考えられる。しかしコンドーム使用行動にはプログラム接触群と非接触群の間に差がみられていないため、今後いかなる介入やアプローチが予防行動の変容に効果的なのかについても考案していく必要がある。

RDS 調査についても、平成 18 年に福岡地域で試行し、本研究班では、名古屋、仙台で実施した。紹介層の起点を NGO とした場合、サークルとした場合では、予防行動、プログラム認知にも差が見られ、コミュニティ内に様々なネットワークが存在することが明らかとなった。データ収集の簡便性など、メリットもあるが、ネットワーク本調査法は、層が伸びにくく対象者の数に限界があることが課題である。

ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント（NLGR）参加者に対する調査（名古屋）では、ノートパソコンを設置し会場でデータ収集を行った。回答の所要時間も 5 分程度であり、操作に関してもトラブルや苦情はほとんど見られずデータ収集・入力・分析の労力の省力化という点からも簡便性と実施可能性が示された。NLGR イベントに参加した東海地域居住の MSM の生涯の HIV 検査受検経験は 2009 年は 76%、2010 年は 71%、過去 1 年の受検経験は 2009 年は 45%、2010 年は 34.6%と高率であった。他の地域のクラブイベント調査と比較しても、本調査分析対象者の 30 歳後半から 40 歳台における検査受検経験率は高く、2001 年から実施してきた NLGR 検査会、名古屋や愛知県内での検査体制の整備はこの年齢層には有効であったことが示唆される。今後は、NGO のプログラムへの接触がないもの、20 歳層の予防介入ニーズの明確化やアウトリーチの拡大が必要である。

H20 年には、ゲイ・バイセクシュアル男性向けイベント NLGR にて実施した検査会、H21 年は、インフルエンザの影響により NLGR 後に実施した代替検査会と M 検において、また H22 年には、NLGR と同時開催した検査会、M 検において受検者調査を実施した。毎年、検査会を実施し、かつ受検者動向の調査を実施して

いるのは名古屋地域のみであり、貴重な評価資料の一つとなっている。しかし、H22 年度のM検においては、受検者人数が少なく、陽性率も 0%と低かった。過去の NLGR、M 検においても陽性率は、1-5%台を推移してきたが、0%であるのは初めてである。アンケート結果からM検は、予防情報への接触があり、定期的に検査を受検している者が多く受検したことが陽性率が 0%であったことに寄与している可能性がある。バー調査からも、名古屋地域における検査受検行動は高く、重点を置いてきたMSMにおける検査行動促進には一定の効果が示唆される。しかしこの3年間の推移、H22 年の受検者調査結果からも、定期的にイベント等で検査を受検したものが多く検査会を利用しており、生涯初めて検査を受ける者の割合は少ないことが明らかとなっている。今後は、感染リスクがあり、検査を受ける機会がなかったものに対し、検査に関する情報を提供し、行動を促進する介入の実施が今後は望まれる。

東北地域においては、クラブイベント関心層向けの調査をH20-H22にかけて毎年計3回実施した。クラブイベント参加者向け調査は、東北地域在住の250名以上の有効回答を得ることで、東北地域でクラブイベントの参加に関心を持つMSMの実態を把握する貴重なデータ収集手段となっている。ただし、回答者が全員クラブイベントに実際に参加しているわけではなくどのような回答者層であるのかをとらえにくいという限界がある。今後は、東北地域においても、商業施設利用者向けの調査も考案する必要があるだろう。

E. 結語

3 年間にわたり、各地域において、コミュニティベースの啓発の活動評価のための評価調査を実施した。大阪地域では 2005、2007 年、2009 年度と継続的に商業施設（バー）顧客調査を実施し介入の効果を示す結果が出つつある。東北地域では商業施設（バー）顧客調査は実施できていないが、複数のベニューで啓発の評価資料となりうるデータを収集できる体制が整った。また、東海地域では、NLGR イベントで来場者のデータを収集し、イベントに並行実施している検査会やM検においても受検者調査を行い実態を把握してきた。来年度での各地域での調査の課題をとらえつつ（表 1）今後も継続的な介入の評価調査の実施が必要である。

F. 発表論文等

（研究論文）

1)新ヶ江章友，金子典代，内海眞，市川誠一：HIV 抗体検査会に参加した東海地域在住 MSM (Men who have Sex with Men)の性自認と HIV 感染リスク行動，日本エイズ学会誌，11(3)，255-262，2009

2)井戸田一朗，金子典代：アジア太平洋地域のMSMとTGにおけるエイズ対策－アジア太平洋地域のMSMとTGにおけるエイズ対策専門家会議の報告を中心に－，日本エイズ学会誌，11(3)，210-217，2009

3)日高庸晴、金子典代：Men who have sex with Men における HIV 感染の動向と行動疫学調査から見える現状，日本エイズ学会誌，1(1)，6-12，2010

4)Seiichi Ichikawa, Noriyo Kaneko, Jane Koerner, Satoshi Shiono, Akitomo Shingae, and Toshihiro Ito: Survey investigating homosexual behaviour among adult males used to estimate the prevalence of HIV and AIDS among men who have sex with men in Japan, Sexual Health, 7, 1-2, 2010

（国際学会発表）

1)Akitomo Shingae, Noriyo Kaneko, Makoto UtsuMi, Seiichi Ichikawa: Differences between Two Samples of MSM attending HIV Testing Events in Nagoya, Japan, the 9th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, 2009 月日, Indonesia

2)Akitomo Shingae, Noriyo Kaneko,

Satoshi Shiono, Yuya Makizono, Daisuke Kawamoto, Kiyoko Kitamura, Toshihiko Nino, Suguru Hashiguchi, Shiro Hamada, Toshihiro Yamamoto, Seiichi Ichikawa: Characteristics of MSM who are 'Inconsistent and Non-Condom Users': Findings of the Gay Bar Survey, the 9th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, 2009 月日, Indonesia

3) Noriyo Kaneko, Yukio Cho, Yuzuru Ikushima, Jane Koerner, Seiichi Ichikawa : LIVING TOGETHER Strategy -Tokyo Group evaluation of the LIVING TOGETHER project, Japan Asian Administrators' Meeting by Ministry of Health, Labour and Welfare, 2010 月日, Tokyo

4) Shingae A, Kaneko N, Utsumi M, Ichikawa S, et al.: Community-based rapid HIV testing for MSM (Men who have Sex with Men) in Nagoya, Japan: Comparison of MSM attending a MSM targeted health center HIV testing with those attending a gay festival, 18th International AIDS Conference, July 2010, Vienna, Austria

(国内学会発表)

1) 日高庸晴, 金子典代, 福山由美：日本のエイズ"ゲイ男性ののぞむ検査環境. 日本看護研究学会, 2008 年 8 月, 神戸

2) 市川誠一, 金子典代, 福山由美：第 28 回看護科学学会　モーニングセミナーHIV 感染の拡大はどこでおきているのか？～看護職者に求められる役割を考える～, 日本看護科学学会　2008 年 12 月, 福岡

3) 新ヶ江章友, 金子典代, 内海眞, 市川誠一：NLGR (Nagoya Lasbian & Gay Revolution) 2008 でのHIV 抗体検査会に参加した東海地域在住 MSM の性自認と性行動、第 22 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2008 月, 大阪

4) 市川誠一, 金子典代, 山田創平, Koerner Jane, 大森佐知子, 木村博和, 鬼塚哲郎, 辻宏幸, 後藤大輔, 町登志雄, 塩野徳史：大阪地域の中高年MSMにおけるMASH大阪の介入認知および予防介入に関する研究、第 22 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2008 月, 大阪

5) 塩野徳史, 市川誠一, 金子典代, コーナ・ジェーン, 新ヶ江章友, 伊藤俊広：日本人男性における MSM (Men who have sex with Men) 人口の推定, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

6) コーナ・ジェーン, 塩野徳史, 金子典代, 新ヶ江章友, 市川誠一：日本在住成人男性を対象とした男性同性間の性行動・性意識調査-MSM 人口に関する海外の調査を日本との比較から-, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

7) 太田貴, 伊藤俊広, 金子典代, 小浜耕治：東北地域における男性同性間の HIV 感染対策－ゲイ・ボランティアグループ「やろっこ」の活動展開－, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

8) 金子典代, 岩橋恒太, 張由紀夫, 荒木順子, 砂川秀樹, 塩野徳史, コーナ・ジェーン, 生島嗣, 佐藤未光, 市川誠一：携帯電話による RDS 法を用いた首都圏での啓発プログラム評価, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

9) 河邉宗知, 張由紀夫, 荒木順子, 柴田恵, 木南拓也, 岩橋恒太, 塩野徳史, 金子典代, 佐藤未光, 木村博和, 市川誠一：新宿 2 丁目における予防啓発プログラムの効果の検討： その 2-バーアンケート調査から-, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

10) 新ヶ江章友, 金子典代, 塩野徳史, 牧園裕也, 川本大輔, 新納利弘, 濱田史郎, 橋口卓, 北村紀代子, 山本政弘, 市川誠一：福岡におけるゲイ向け商業施設利用者を対象とした質問紙調査, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋

11) 新ヶ江章友、金子典代 (組織・座長)：MSM

社会とのインターフェイス—臨床・検査・社会の協働（若手企画／臨床・社会コラボシンポジウム），第23回日本エイズ学会学術集会・総会，2009年11月，名古屋

12)新ヶ江章友、金子典代、石田敏彦、藤浦裕二、内海眞、横幕能行、市川誠一：名古屋市で開催されているゲイ・バイセクシュアル男性向けHIV抗体検査会における検査受検者の経年的推移，第24回日本エイズ学会学術集会・総会，2010年11月，東京

13)新ヶ江章友，金子典代，石田敏彦，藤浦裕二，内海眞，横幕能行，市川誠一：名古屋市で開催されているゲイ・バイセクシュアル男性向けHIV抗体検査会における検査受検者の経年的推移，第24回日本エイズ学会学術集会・総会，2010年11月，東京

14)塩野徳史，市川誠一，町登志雄，内田優，後藤大輔，辻宏幸，鬼塚哲郎，金子典代，山田創平：近畿地域在住MSM（Men who have sex with men）におけるコンドーム常用割合の推移と予防介入の効果評価に関する研究，第24回日本エイズ学会学術集会・総会，2010年11月，東京

15)塩野徳史，岩橋恒太，市川誠一，金子典代，コーナ・ジェーン，生島嗣，佐藤未光，張由紀夫，木南拓也，砂川秀樹，星野慎二，木村哲，岡慎一：首都圏地域在住MSM（Men who have sex with men）における性行動と年齢層の関連，第24回日本エイズ学会学術集会・総会，2010年11月，東京

表2. 平成20-22年度　地域別コミュニティーベース主要介入と効果評価調査

地域	拠点	NGO名称	コミュニティーセンター	介入プログラム ＊コミュニティーセンター運営は除く	コミュニティーベースの効果評価調査	調査の今後の課題
東北	仙台	やろっこ	ZEL(仙台市 H22.3月開設)	コンドームアウトリーチ 仙台版LTラウンジ(陽性者手記朗読) イベント(クラブ、スポーツ)での資材配布 WEB運営	クラブイベント関心層への調査 スポーツイベント来場者調査 CBO起点携帯電話調査(RDS)	・バー調査など対象者の特性把握が可能な量的調査の継続的な実施 ・コミュニティーセンター、プログラムの効果評価
東京	東京都 新宿区	Rainbow　Ring	akta(新宿区)	コンドームアウトリーチ コミュニティー向けaktaの月刊ペーパー LTラウンジ(陽性者の手記朗読) WEB運営	クラブイベント来場者調査 商業施設(バー)利用者調査＊ バーオーナーインタビュー調査 携帯電話調査(RDS)＊	・クラブイベント来場者調査等の大規模調査の継続的な実施 ・介入の浸透度の経年的評価、プログラム接触有無別の予防行動促進効果
東海	名古屋市	ANGEL LIFE NAGOYA	rise(名古屋市)	イベント併設検査会NLGR、M検 コンドームアウトリーチ コミュニティーペーパー 勉強会 WEB運営	NLGR来場者調査 NLGR受検者、M検受検者調査 商業施設(バー)利用者調査	・調査の継続的な実施 ・コミュニティーセンター、プログラムの効果評価
関西	大阪市	MASH大阪	dista(大阪市)	コミュニティーペーパー 勉強会 若者向けサークル WEB運営	クラブイベント来場者調査 商業施設(バー)利用者調査 携帯電話調査(RDS)＊	・クラブイベント来場者調査、バー顧客調査等の大規模調査の継続的実施 ・介入の浸透度の経年的評価、プログラム接触有無別の予防行動促進効果
九州	福岡市	LoveActFukuoka	haco(福岡市)	コミュニティーペーパー コンドームアウトリーチ 勉強会 WEB開設	商業施設(バー)利用者調査	・量的調査の継続的実施(バー利用者調査、携帯電話調査) ・介入の浸透度の経年的評価
沖縄	那覇市	nankr	mabui(那覇市 H22.3月開設)	コミュニティーペーパー コンドームアウトリーチ WEB運営	検査受検者調査 商業施設(バー)利用者調査	・量的調査の継続的実施(バー利用者調査、その他クラブ利用者、サークル層向け調査) ・コミュニティーセンター、プログラムの効果評価

Ⅲ. 研究成果刊行物一覧

研究論文別刷

Ⅲ. 研究成果刊行物一覧

発表者氏名	論文タイトル名	雑誌名	巻号	ページ	出版年
市川誠一	男性同性間の HIV 感染予防対策—生育過程におけるとり組みの必要性—	季刊セクシュアリティ	34	58-61	2008
Ichikawa S, Cho Y, Sato M	The Activities and Role of the Gay Community Center 'akta' in HIV Prevention within the Gay Community in Tokyo	Challenging Practices on HIV/AIDS in Japan, 2008 (Japanese Foundation for AIDS Prevention)		52-57	2008
市川誠一	日本の HIV/AIDS の動向とその対策の方向性	名古屋市立大学看護学部紀要	8	1-7	2008
市川誠一	日本における MSM (Men who have Sex with Men)間の HIV/AIDS の流行とその対策—疫学の視点から—	F-GENS Publication Series (お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」)	33	9-18	2008
市川誠一	HIV 陽性者と一緒に生きていく社会の形成をめざして—感染症対策の視点から—	保健師ジャーナル	65 巻 11 号	898-904	2009
市川誠一	HIV 感染の疫学と対策—MSM における HIV 感染症とその対策	BIO Clinica	24 巻 7 号	594-599	2009
新ヶ江章友、金子典代、内海眞、市川誠一	HIV 抗体検査会に参加した東海在住 MSM (Men who have Sex with Men) の性自認と HIV 感染リスク行動	日本エイズ学会誌	11 巻 3 号	255-262	2009

井戸田一朗、金子典代	アジア太平洋地域の MSM と TG におけるエイズ対策―アジア太平洋地域の MSM と TG におけるエイズ対策専門家会議の報告を中心に―	日本エイズ学会誌	11 巻 3 号	210-217	2009
市川誠一	男性同性間の HIV 感染予防対策	日本臨床	68 巻 3 号	546-550	2010
市川誠一	MSM における HIV 感染者/AIDS 患者の現状と予防戦略	公衆衛生	74 巻 11 号	906-909	2010
市川誠一	HIV/AIDS 対策への取組み	総合臨床	59 巻 3 号	416-420	2010
塩野徳史、市川誠一	MSM の HIV 感染対策におけるコミュニティセンター事業の意義	病原微生物検出情報	31 巻 8 号	229-230	2010
Ichikawa S, Kaneko N, Koerner J, Shiono S, Shingae A, Ito T	Survey investigating homosexual behavior among adult males used to estimate the prevalence of HIV and AIDS among men who have sex with men in Japan	Sexual Health	8 巻 1 号	123-124	2011

研究者が語る

男性同性間のHIV感染対策
—生育過程におけるとり組みの必要性—

市川誠一
ICHIKAWA Seiichi

名古屋市立大学看護学部・教授（感染予防学）。HIV感染症の疫学研究を専門としている。95年から男性同性間のHIV感染対策に取り組み、現在は仙台、東京、名古屋、大阪、福岡で同性愛者のボランティアグループと一緒に啓発普及を進めている。彼らの開発した啓発資材には異性愛者にも応用できるものが多い。

94年、横浜で第10回国際エイズ会議が開催され、私は横浜市立大学医学部公衆衛生学講座に勤務していた関係で横浜市主催のサテライトシンポジウムの運営に関わることとなりました。その頃の日本のHIV感染症の動向は、外国国籍女性の報告例が92年のピークの後に急激に減少していた時期で、おそらく多くの日本人は「日本では海外のような状況にならない」と思っていたのではないでしょうか。そのことは国際エイズ会議後にエイズ報道が激減し、最近では殆ど取り上げられなくなったことからも推察できます。私が最初に会った男性同性愛者はアメリカからサテライトシンポジウムに発表に来てくれた方で、彼はHIV陽性者でもありました。免疫状態が必ずしも良い状態でなかったにも関わらず、日本のエイズへの取り組みについて、感染者に対する差別や偏見をなくした啓発の必要性を訴えていました。優しい、穏やかな、でもしっかりとした主張を持っていました。彼との出会いでは、男性同性愛者や異性愛者といったことを意識することはありませんでした。

その後、日本のHIV／エイズの発生動向について分析する機会があり、感染経路別に報告の推移を見ていて男性同性間の性的接触による感染が上昇傾向にあることに気づき、また海外、特に欧米で男性同性間のHIV感染が多く見られていることから、日本の男性同性間のHIV感染について厚生労働省HIV疫学研究班で取り組むことになりました。おそらく同性愛者の人たちには研究者が研究業績を目的に取り組み始めたように見えたことと思います。事実、セクシュアリティについて全く知識もなく、同性愛者の友達がいるわけでもないので当然と思います。今では、仙台、東京、名古屋、大阪、福岡で同性愛者のボランティア組織と一緒にHIV感染対策に取り組んでいます。

男性同性間感染の増加

厚生労働省エイズ動向調査によれば、未発症HIV感染者（以下、HIV感染者）及びエイズ患者の報告数は96年以降日本国籍男性を中心に増加が続いています。日本国籍例を感染経路別にみると、HIV感染者では男性同性間の性的接触が00年から報告数の過半数を占め06年には68％となっています。特に、15－24歳層では男性同性間感染の割合は80％を超え、また25－34歳層でも70％を超える状況にあります。若者でHIV感染が増加していることは関係者では知られていますが、若者の中で男性同性間の感染が増えていることについてはあまり知られていません。また、エイズ患者においても男性同性間の性的接触は増加が続き01年から三分の一を占め、05年には43％となっています。このエイズ患者のうち20歳代が占める割合は、男性の異性間感染例では、6・4％であるのに対して男性同性間感染例では、が14・9％と高いことからも、若年層での同性間の性的接触によるHIV感染への予防が重要であることが伺えます。これら若年層はHIVや性感染症のことを、どこで、誰に相談すればいいのでしょうか。そして誰が彼らに予防のことや感染した後の治療のことを啓発するのでしょうか。

感染増加の背景と学校教育

わが国のエイズに関する啓発は、80年代後半になって

パンフレット等を介して広く国民に行うようになりました。しかし、啓発資材に記載される情報は異性愛者を対象にしたものが殆どで同性間の感染予防に関する情報等は乏しい状況にあったといえます。コンドームを使用しないアナルセックスが男性同性間の性的接触によるＨＩＶ感染のリスク要因であることはこれまでの研究で明らかにされています。しかし、わが国ではコンドームは避妊具として普及されてきた経緯があり、男性同性愛者間の性行動においては避妊具としてのコンドームを必要とせず、わが国で見られるコンドーム観が男性同性間でのコンドーム使用を妨げてきた一因とも考えられます。

また、男性同性間でＨＩＶ感染が増加している背景として性的指向に関することや同性間のセックスと性感染症予防に関することなどの教育が同性愛者の生育過程にそって行われておらず、自己の性的指向についての悩み、不安などを相談する社会的環境が十分でないことも関連していると思われます。学校教育の中で性的指向についての悩みを抱え情報を必要としている生徒を受け入れていく環境が必要ではないでしょうか。

男性同性愛者は学校教育の中で同性愛や性的指向に関してどのような情報を得ているだろうか？この点について、男性同性愛者を対象にしたインターネット上での質問紙調査（05年、５７３１人の回答）で、「これまで学校教育で同性愛についてどのような情報を得てきたか」を尋ねたところ、「同性愛について肯定的な情報」は４・３％と極めて少なく、「一切習っていない」が78・５％、「同性愛は異常なもの」が３・９％、「同性愛について否定的な情報」が10・７％、「その他」が０・６％でありました。また若年層ほど「一切習っていない」の回答は少なくなっているものの「否定的な情報」の割合が高くなっており、同性愛への対応については必ずしも改善されているとはいえない状況にあります。

ＨＩＶ感染予防は個人の予防行動に依存するところではありますが、この予防行動を行いやすくしていく社会環境を構築していくことも重要と考えます。

愛知県のＨＩＶ／エイズ動向

厚生労働省は近年のＨＩＶ／エイズ報告数の増加を鑑み、エイズ対策を重点的に推進する必要がある自治体として10都府県、６政令指定都市（16自治体）を指定しています。愛知県および名古屋市はその指定自治体に含ま

Providing Right Message and Information

for Target Population

The Activities and Role of the Gay Community Center 'akta' in HIV Prevention within the Gay Community in Tokyo

Seiichi ICHIKAWA[1], Yukio CHO[2] and Mio SATO[3]

[1]Infection Control and Prevention, Nagoya City University, School of Nursing

[2]Japanese Foundation for AIDS Prevention/Community Center akta/ Rainbow Ring

[3]Hikari Clinic/ Community Center akta/ Rainbow Ring

Abstract

HIV transmission through homosexual contact continues to rise, accounting for 60% of HIV and 40% of AIDS new reports in Japan. In particular, HIV infections have been rapidly increasing, not only in Tokyo and Osaka, but also in Nagoya, Fukuoka and Okinawa.

'akta' was established in Shinjiku 2 Chome in 2003, an area in Tokyo which has a large concentration of gay commercial venues, in order to conduct and facilitate HIV prevention activities amongst gay and bisexual men, through funding provided by the Foundation for AIDS Prevention.

While the Tokyo area has a wide range of socially and sexually diverse gay and bisexual men and groups, evaluation research indicates that' akta' has been effective in accessing a wide range of groups and in developing and HIV prevention materials and programs. The existence of the Community Center has facilitated a number of outreach programs including'Deli-he(a)l(th)' which provides condom outreach to gay bars and clubs, as well as the conducting of education workshops with young gay men and gay sauna staff funded by the Tokyo municipal health department.

Community center 'akta' conducts a wide range of activities and it's existence has facilitated the condom outreach activities conducted by 'Delivery Boys', attracted support from the media including gay magazines and club event organizers, as well as fostered cooperation with NGOs such as PLACE Tokyo (a CBO who provides support to people living with HIV and AIDS) in developing materials and community education projects to make visible the existence of peoples living with HIV and AIDS within the gay community.

The activities of the Community Center have been driven by a community development approach, and through the involvement of artists, designers and drag queens in developing materials and organizing events, the center has allowing a large number of gay community members to network and connect in a way that would not have been previously possible. Culturally appropriate materials and programs designed by gay staff have ensured that outputs have been of a high quality. Furthermore, the establishment of the center has been critical in creating a cultural and social focal space for gay and bisexual men to meet, get information and hold events.

Keywords: MSM, Gay-bi sexual male, HIV, AIDS, Prevention

1. Introduction

According to the Ministry of Health, Labour and Welfare (MHLW) AIDS Trends Annual Report[1)], the number of reported cases of persons infected with HIV and AIDS patients has continued to rise since 1996, particularly among Japanese males. In 2006, homosexual transmission accounted for more than 60% of new HIV infected cases and 40% of AIDS patients. Since the late 1990s, significant increases in HIV infection rates have been seen in Osaka and Aichi in addition to Tokyo, with signs of an increase in regions such as Fukuoka and Okinawa. While HIV prevention activities have been conducted among gay communities in Japan since the 1990s, the relative levels of funding and size of gay community groups conducting such activities have been quite small. Despite this, the activities of gay community groups were instrumental in pushing the AIDS Prevention Guideline Review Committee to re-evaluate MHLW HIV policies and subsequently 'men who have sex with men' (MSM) were identified as a target group facilitating targeted funding for HIV prevention for MSM from 2003. Establishing community centers in the gay community was seen as a way to build a supportive environment for behavioral change at the community level as well as to disseminate HIV prevention activities and materials to MSM. In response

to this, funding was provided through the Japanese Foundation for AIDS Prevention to open Community Center 'akta' in Shinjuku 2-Chome, an area in Tokyo which had a concentration of commercial establishments for gay and bisexual men. For the purpose of this paper, gay community is defined as gay and bisexual men, and men who have sex with men (MSM) accessing gay commercial venues including gay bars, gay clubs, gay shops, and gay saunas.

2. The Meaning of Having "A Place"

1) Community Center 'akta's Role as a "Place" in the Gay Community

Local communities have libraries and public facilities that are open to residents. There residents can freely access these facilities to obtain information and participate and develop activities which enhance their day to day life. However, due to the stigma associated with homosexuality, general public facilities are not freely accessed by gay and bisexual males for the purpose of getting information and conducting community development activities.

The lack of a place to conduct community development activities and promote information exchange amongst gay and bisexual men has impeded efforts to conduct HIV prevention activities in Japan. Without a base where gay and bisexual men gather to meet and obtain information, there was no place from which dissemination of HIV information, materials and activities could be developed, conducted or distributed.

Community Center 'akta' was opening in 2003, in Shinjuku 2-Chome, in Shinjuku ward in Tokyo. The establishment of 'acta' has created a physical and openly visible place where individuals, groups and organizations concerned with gay community issues including health, welfare, community development, and arts can access. Thus, 'akta' has created a place where gay and bisexual men can by chance obtain gay community information, including information relating to HIV/AIDS, gay community events, health, welfare and social services targeting gay community members, and allowing the linking of various informational and social networks.

2) 'akta's Activities

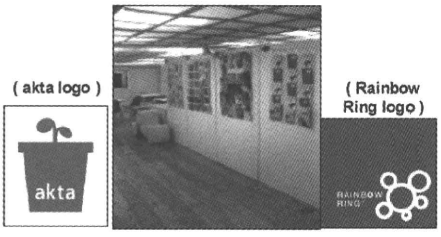
Shinjuku 2-Chome has the largest conglomeration of gay businesses in Japan with roughly 300 gay bars as well as gay shops, clubs, saunas, and beats/cruising spots. The area has a long history as being a place where gay and bisexual men gather and currently several thousand gay and bisexual men visit the area on any particular day. On the weekends, club events and the like are held and attended by gay and bisexual men from all over Japan.

Apart than Shinjuku 2-Chome, in Tokyo there are also concentrations of gay commercial establishments in the Ueno/Asakusa area, in Shimbashi and in the Shibuya area. There are a number of major gay magazine publishers in the city, and through this media it is possible to reach large populations of gay and bisexual men not only in Tokyo but through the whole of Japan. Through increased Internet use, MSM without direct physical access to gay commercial areas, gay saunas and cruising areas, and gay magazines have also been increasing, and the diversity of the gay community in the Tokyo area can be said to be continually expanding.

Community Center 'akta' was established by the Japanese Foundation for AIDS Prevention as an "educational facility for implementing HIV/STI prevention among gay and bisexual men" and it has now been operating for four years. The reason for establishing 'akta'in Shinjuku 2-Chome was in order to reach gay and bisexual men accessing gay bars and businesses who are not interested in HIV/AIDS and related education and preventive activities. The most important consideration was the creation of an open and relaxing atmosphere which could also be a space where exhibitions could be held (Fig. 1). Rainbow Ring, a gay NGO which has been conducting HIV related research and prevention in the Tokyo area has managed the Center since 2002.[2)3)]

Since its establishment, 'akta' has become well known in the Tokyo area as well as nationally as a base for HIV prevention and community development among the gay community. According to a questionnaire survey conducted in 2005 with MSM attending club events in Tokyo, "MSM who frequently visit Shinjuku 2-Chome had a high recognition rate of 'akta', and the ratio of MSM who had actually visited 'akta' was also high"[4)] (Fig. 2)

Community Center 'akta' has also become a place for gay cultural, social, health and welfare groups, government bureaucrats dealing with HIV related portfolios, and NPOs/NGOs concerned with HIV, health, drug and alcohol, mental health issues, as well as sexuality, sexual minorities, and migrant issues to network. 'akta' has developed a strong base from which HIV prevention activities can be conceptualized and implemented in collaboration with a wide range of gay-related commercial establishments. It has



Community Center 'akta'
Dai-ni Nakae Bldg., Room No. 301
2-5-13 Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo
Hall open: 4:00pm – 10:00pm
Closed: 2nd Sunday of every month, year-end holidays

Fig. 1 Interior of Community Center 'akta' in Tokyo

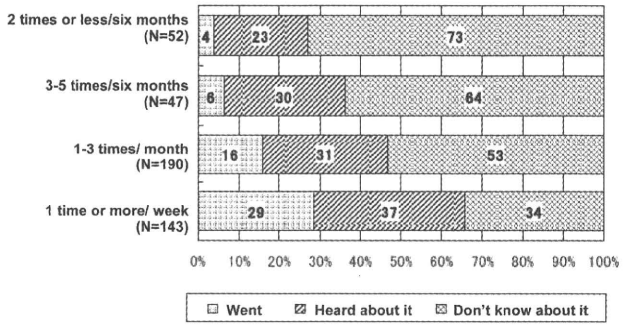


Fig. 2 Recognition Level of Community Center 'akta' Among MSM's According to Visiting Frequency to Shinjuku 2-Chome

become a place where individuals, organizations, government officials researchers and students concerned with HIV and AIDS, who previously had little experience relating to the gay community, to work with gay community members, thus facilitating the implementation and development of HIV prevention activities for MSM. (Fig. 3) One example of this is the conceptualization, development and implementation of the condom outreach project 'Deli-Hel Boys' (Delivery Health) delivering condoms and HIV prevention materials to gay bars, venues, shops and saunas.

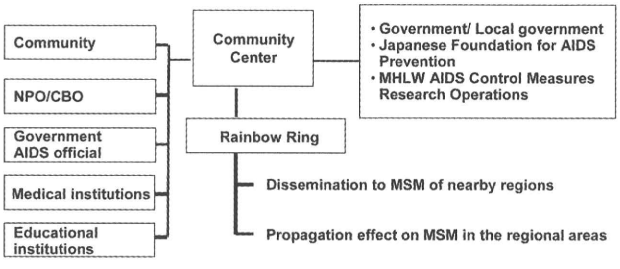


Fig. 3 Figure Describing the Types of Organizations with whom Community Center 'akta' Collaborates

3) Community Center 'akta' Activities

The activities that Community Center 'akta' is primarily involved in are as follows:

- Development of HIV related materials and programs for the gay community
- Distribution of HIV related materials and outreach to gay businesses
- Providing a space for information relevant to the gay community
- Providing a space for those involved in HIV/AIDS prevention and support to use
- Providing a place to conduct community related educational workshops and lectures, etc.
- Exhibition space (for gay community and HIV related artists etc)

Community Center 'akta' has space available for artists in the community to conduct exhibitions. Events have included art exhibitions and musical performances, and holding them at 'akta' has created opportunities to reach people not usually interested in HIV. Networks have been formed with community artists holding art events, and other culturally significant leaders in the gay community including musicians, dance party organizers, DJs and the like. The utilization of such networks has facilitated the development and distribution of educational materials and programs. In the 2005 financial year, there were over 10,000 cumulative visits to 'akta'.

Accompanying the increase in the number of visitors to 'akta', the number of requests for information from clients has also been increasing. Many of the consultations relate to HIV (including: where to go for HIV testing, concerns about how HIV infection occurs, availability of medical care and support for infected persons) as well as concerning STIs , the use of illegal drugs, homelessness, mental health issues, coming out and family issues. In response to these consultations, 'akta' staff must expertly listen to the persons concerns, and refer the person on to the relevant NGO, government service, or support group as necessary. In the case of an emergency, information materials regarding HIV testing, appropriate medical and treatment services have been collated.

A barrier to conducting HIV related activities within the gay community has been the absence of gay

community newspapers. In order to publicize gay community activities, as well as providing a forum to discuss gay community issues, 'akta' publishes a newsletter "monthly akta" and approximately 5,000 copies are distributed every month through outreach and at gay events through the 'Delivery Health Boys' (described below). The paper contains the 'akta' monthly schedule, community information, as well as information about HIV and STI testing, medical treatment and support services, and HIV related projects and activities being conducted through 'akta' and other organization.

3. Providing a Real Face for HIV Related Activities

1) Outreach Project 'Deli-hel' (Delivery Health Boys)

'Deri-Hel (an abbreviation for 'Delivery Health)' is the name for the outreach project in which condoms, HIV related materials and 'akta' monthly newsletters are distributed to gay bars, club events, gay shops and saunas by volunteer staff who are called Delivery Boys. Most of the establishments in Shinjuku 2-Chome are gay bars, clubs, shops and saunas, accessed by approximately several thousand gays and bisexual men daily. Outreach activities aim to raise the visibility and awareness of AIDS, STDs and safe sex through condom distribution to gay bar customers and employees.

In July 2003, "Delivery Boys" volunteers were solicited via flyer and internet advertisements, and from September 2003 they began distributing condoms every Friday evening. In order to make educational activities visible in the community, the Delivery Boys wear fashionably cool uniform overalls while doing outreach in Shinjuku 2-Chome. Condom packages were originally made in seven designs which was later increased in number and printed on the scale of 4,000 units per design (See Fig. 4). The reason for creating many different designs is to maintain customers' ongoing interest in condoms and to foster appeal in a wide range of ages and tastes. Condom dispensers installed in bars and clubs were made in a size which would not get in the way of the business activities of the cooperating venues, and original dispensers were made of collapsible card board that could be made cheaply and simply. From the outset, the philosophy behind the project was to develop outreach activities in a way which would be sustainable over the long-term (Fig. 4).

Key to the ongoing continuation of the 'Deli-Hel' project is the volunteer staff of young gay and bisexual men (mainly in their early 20s). Many of the volunteers joined the project motivated by the "cool" or "fun" image. Since beginning the Deli Heru project, despite a turnover of staff, outreach activities have been maintained every week. Conducting outreach to the various gay bars and venues is a fun experience for the Delivery Boy Volunteers, and allows them to participate and be visible within the gay community in a constructive way which sustains the motivation of the volunteer staff. Participating in condom delivery activities serves as an opportunity for the Delivery Boy Volunteers to educate themselves. In order to be able to respond to gay bar customers and staff questions about safe sex, HIV and STIs, Delivery Boy Volunteers conduct training workshops. Every week between 7 and 10 Delivery Boy volunteers distribute condoms to 140 to 150 establishments. The activities of this 'Deli-Hel' project have been covered in a special feature of a gay magazine and have become well known not only in Tokyo but all over Japan. The 'Deli-Hel' project plays a role of forming connections with commercial establishments and has the function of promoting the HIV related activities conducted through 'akta' and other organizations.

4 Creating a Space for Collaboration and Networking

1) Art Exhibition Space

At 'akta', gay community artists are able to use the space to hold exhibitions, lectures, film showings and the like. Gay community members interested in these projects come to 'akta', and as a result a group of people not necessarily interested in HIV/AIDS are brought to the Center. Also the artists who hold exhibitions at 'akta' become interested in the activities being conducted there, and subsequently participate in helping create educational and promotional materials. 'akta' is a place that brings educational activities and gay community members together and plays a role in expanding community activities.

2) Condom Package Design Project

The production and distribution of condoms is seen as important to raise the visibility of condoms as a HIV and STI prevention tool, rather than merely a contraceptive for heterosexuals. To make the condoms appealing to MSM, to date there have been 62 types of condom package designs created. Among these designs, many have been created with the help of gay and non-gay artists and designers. This has resulted in the development of educational materials which appeal to groups with various interests (Fig. 4). The

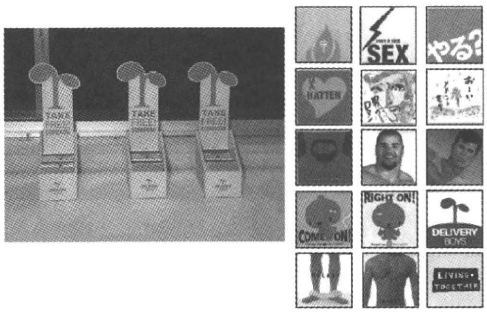


Fig. 4 Condom Outreach Materials
Condom dispensers and condom packages

condom designs are talked about in the bars and clubs, by customers and staff raising the visibility of 'akta' activities. The artists and designers who help create the designs are also key persons in the community and the participation of such people is a major contribution in making HIV more visible in the community.

By including the community in the creation of HIV prevention materials, in contrast to contracting material design through a commercial advertising agency, materials are created which take into account the actual needs of the gay community escalating the appeal of the materials and improving HIV awareness in the community.

3) Collaborative Projects

A number of projects have been developed with the purpose of raising the visibility of HIV positive people within the gay community. The Living Together project started from an exhibition held by NPO "PLACE Tokyo" at 'akta' on the theme "Living Together with HIV-positive People". The exhibition included photos and journal excerpts written by HIV positive people, their friends and family, which was made into a booklet "Living Together" published by PLACE Tokyo. This booklet is used to conduct "Living Together Lounge" events, held once a month in Shinjuku 2 Chome (Fig. 5), in which journal excerpts are read to background music. The "Living Together Lounge" is the joint effort of large number of people including musicians, doctors, government officials, and famous people who have been asked to do readings as well as the people who attend the event and staff. Each event is attended by more than 50 people from diverse range of sexualities, backgrounds, and ages.

A related program is the "EASY! Campaign" conducted during the month of December in 2005. The idea behind "EASY!" was the promotion that HIV positive people and HIV negative people living together in the gay community is 'easy'. This project produced a number of 'Easy' educational materials (including 5,105 condom sets, 2,785 photo books) which were distributed at a wide range of events accessed by gay community members through the cooperation of gay bar owners and gay event organizers. The photo books employed good design and photographs appealing to gay men in an effort to reach people indifferent to HIV.

We're living together in this town.
A bit embarrassing to say in words.
Sex, sexuality, age, work, really there's all kinds.
A favorite type, different for everybody.
For every couple that seems to be the same,
There's another couple that's completely different.
Sure there's plenty of people happy without a boyfriend,
And there's even more people who have good relationships with other people
HIV-positive people too and HIV-negative people are living together.
A person who hasn't been tested just doesn't know their own situation.
You can't tell if someone is infected just by looking at them but,
We're already living together.

*Text excerpted from an LT advertising flyer.

Fig. 5 Living Together (LT) Project
Advertising flyer for a Living Together event and photo of someone reading at a Living Together event

The Living Together and Easy projects were successful, not only in bringing a number of NGOs together to collaborate, but also was able to involve many HIV-positive people, and create materials where the reality and opinions of HIV positive people could be exchanged. By actually thinking about the issues facing HIV-positive people in the gay community, the project became an opportunity to make HIV visible as something related to oneself and also bring about self awareness about HIV prevention.

5. Conclusion

In the highly diverse gay community in Tokyo, the establishment of 'akta' has played a significant role in developing and implementing a wide range of activities and materials aiming to raise the awareness about HIV. Employing a community development based approach, preventive education programs such as condom outreach have been carried out with the co-operation of gay bars, gay saunas, and gay shops and HIV workshops at gay club events obtained financial support from the Tokyo Metropolitan government.